

一念三千の原理

一念三千

一念三千とは、人間の一瞬の心の働きの中に、宇宙の全ての性質が内包されているというもの。ヒンズー教の「梵我一如」(小宇宙である自己と大宇宙は一体であるとする思想)と同じような意味。従って「我」を否定した釈迦の見方とは異なる。

この一念の念(心の働き)は、人間だけに限ったことではなく、すべての衆生における意志の状態。それを起因として外界に作用を現したとき、その要素として三千種あるとみなす。その三千とは、 $10(十界) \times 10(十界) \times 10(十如是) \times 3(三世間) = 3,000$ 種とする。
※この3,000という数が問題なのではなく、要するに全宇宙の要素を含んでいることを示している。
※「念」とは、衆生の動作(表象)を観察した結果から考察したその要因を指している。そこに宇宙の要素を見いだせることを「一念三千」と表現している。

十界

心は時には、仏の心になったり、あるいは地獄の心になったりする。

地獄 苦しみそのものの境地
餓鬼 欲望に使役された境地 あれが欲しいこれが欲しい
畜生 本能のまま生きる境地 権威に媚び諂う
修羅 戦いの境地 相手を倒したい
人間 争いの無くなった世界
天 喜びの世界
声聞 教えを聞いて、あるいは他人の指導によって修行して悟る
縁覚 単独で真理を悟る 一人修行を重ねて悟る
菩薩 慈悲の境地 自分よりも他人をまず悟らせる
仏 宇宙の真理を体得した境地 智慧の完成

十界互具

仏から地獄までの、いずれの境地にあっても、その中に仏から地獄までの境地を含んでいる。

十如是

宇宙に存在するもの全ては、仏から地獄までがどのような範疇で現れるのかを考察したもの。十の範疇において、存在により仏から地獄までの差異がある。

- 如是相 形、外から見える外形は存在によって異なる。
如是性 内部の性質は存在によって異なる。
如是体 体積や重さは存在によって異なる。
如是力 内部に秘めた力は存在によって異なる。
如是作 外部に対しての作用は存在によって異なる。
如是因 ある存在が現在そのような状態になっているのは原因がある。
如是縁 ある存在が外部からさまざまな影響を受けている。
如是果 ある原因の結果、その存在が現在の状態になった。
如是報 ある存在が外部に対して為した作用によって、その報いを受ける。
本末究竟等 これら如是相から如是報までの9つ如是は全て平等独立している。

・これら全ては、時間と共に変化する。存在は「空」(実体なし)である。

三世間

これら宇宙に存在するもの全てが、以下の3つの世界(注)に姿を異にして現れている。

- 国土世間 全宇宙を表す。全ての存在はその中に有る。
衆生世間 人間も含めた生き物の生きる世界である。全ての生命はその中に存在する。
五蘊世間 全ての存在は、原子のような小さいものまでどこまでも細かく分割され、それぞれが存在している。存在しているもの全てには「色、受、想、行、識」の5つの構成要素が備わっている。

(注)これら3つの世界は全く別のものではなく、同じ世界を異なる視点で見ているに過ぎない。

世界に対する認識としての十界、十如是、三世間は、ともに「空」であることを理解するところが肝心

仏教の自己矛盾性と三諦論

●自己否定型の考え方

科学の基本原則でもある「絶対性の否定」は、それ自体自己矛盾を含んでいます。即ち、すべての絶対性が否定されるなら、この「絶対性の否定」も絶対ではないことになる。ならば、「絶対性」が否定されないこともあり得るというわけです。

同様の考え方は仏教では頻繁に出てきます。たとえば「無常」。この「無常」も無常なのか？ならば否定の否定で、「常」(変わらないこと)もありえ得る。あるいは「中道」(何に対しても偏らない生き方)についても、「中道」自身にも偏ってはいけないということ？そして「空」です。「空」自体も空ですか？このような考え方を自己否定型と言います。

ここで「無常」自体は「無常」ではない。「中道」自体には偏ってもいい。「空」だけは空ではない。という考え方もできます。ただし、そうすると、「無常」も「中道」も「空」も普遍的考え方(宇宙のあらゆる存在において成り立つ)ではなくなります。

●絶対性の否定の否定

絶対性の否定の否定は肯定。即ち絶対的なものが存在する。それが肯定されているわけです。ただしこの考え方は、「絶対性の否定」が前提となっています。即ち、「絶対性の肯定」と「絶対性の否定」が相反しながら共に成り立っているわけです。

これは弁証法の哲学です。

弁証法では、この世界に、仮に「正」(正しいこと)があれば、必ずその反対のこと「反」があります。

世界は簡単に「一方が正しく、他方が誤り」と言う具合に簡単に割り切れるものではありません。

さらに弁証法では、「正」と「反」を共に批判的に統一した「合」に至るのです。その営みを尽きることなく繰り返す。これがこの世界の現実だというのが弁証法の哲学(注)です。

弁証法という考え方は古代ギリシャ哲学からありましたが、ドイツの観念哲学として、カントやヘーゲルなどの哲学者が有名。

カント:1724~1804、ヘーゲル:1770~1831

●三諦論 「空」を否定した考え方

「空」も空であると、空が否定されて「実」になってしまう。しかし「空」は空ではないとすると「空」の普遍性が失われる。

ここで天台教学(天台大師・智顛の思想を基にした仏教の教え)の哲学である三諦論について解説します。三諦とは、空諦、仮諦、中諦。もとはナーガールジュナ(注)の思想であって、まず「縁起」により「空」があり、空も空であるが、「仮」に空とする。最後に空にも非空にも偏らない立場として「中道」となる。

なかなか難しい思想ですが、要するに、この世界の一切は「空」であるが、この空も絶対視してはならないよ。それらから離れた「中」に至りなさい。ということをお教えているのです。(この考え方は天台教学の三諦論とは若干異なる)

インドの僧。仏教界の天才思想家。